

SMP055-P23

会場:コンベンションホール

時間: 5月23日17:15-18:45

南インド、ケララ・コンダライト帯の泥質グラニュライトから初めて確認された藍晶石

Kyanite newly found in pelitic granulite from Kerala Khondalite Belt, southern India

廣井 美邦^{1*}, 三井兵衛¹, 加藤 睦実¹, 外田 智千², サティシュ・クマール³

Yoshikuni Hiroi^{1*}, Hyoue Mitsui¹, Mutsumi Kato¹, Tomokazu Hokada², Satish-Kumar M.³

¹千葉大学, ²国立極地研究所, ³静岡大学

¹Chiba University, ²National Institute of Polar Research, ³Shizuoka University

インドの南端部は、かつて、スリランカとともに南極の昭和基地周辺地域に隣接し、原生代末期ないし古生代初期の東・西 Gondwana 大陸の縫合帯縁辺部に位置していた。これまでの研究から、南極昭和基地周辺地域（リュツォ・ホルム岩体）およびスリランカ（ハイランド岩体）に産出する泥質グラニュライトでは、もっとも普遍的で安定な相である珪線石に加えてザクロ石等に包有された残晶状の藍晶石と後退変成時に生成した紅柱石が見出されており、それがこれらの岩体の特徴になっていた。一方、南インドのグラニュライト相地域（ケララ・コンダライト帯）からはこれらの鉱物は報告されていなかった。そこで、多数の薄片を検鏡して探査した結果、まず紅柱石が見出され（加藤ら、2009）、次いで藍晶石も確認された。しかし、今回確認された藍晶石は極めてまれで、変質した堇青石中の他形・微細粒であり、南極やスリランカのものとは産状が異なる。その原因を含めて、南インドにおける藍晶石出現の意味を考察する。

キーワード: 藍晶石, 紅柱石, 珪線石, 泥質グラニュライト, 南インド, Gondwana

Keywords: kyanite, andalusite, sillimanite, pelitic granulite, southern India, Gondwana